Ⅱ-1

婦人科領域

不正性器出血があったら

萩原聖子[1)] 小林裕明[2)] 和氣徳夫[3)]

1）九州大学医学部 産科婦人科 助教
2）九州大学大学院医学研究院 生殖病態生理学 准教授
3）九州大学大学院医学研究院 生殖病態生理学 教授

Point 1 月経のメカニズムを理解し，機能性出血について説明できる．

Point 2 患者年齢と的確な問診により，不正出血をきたす疾患の鑑別診断が挙げられる．

Point 3 適切な検査を選択し，出血部位と原因を特定できる．

Point 4 緊急性を判断し，適切な治療を選択できる．

はじめに

不正出血（不正性器出血）とは生理的出血とされる月経，分娩，産褥期の出血以外の病的出血と定義される．不正出血は日常診療において，年齢を問わず最も多い受診症状のひとつである．不正出血の症状と成因は多岐にわたり，体系化された手順にのっとって鑑別していくことが大切である．

幼少期，思春期，性成熟期，更年期，老年期では内分泌背景が異なるため，患者の年齢に特徴的なホルモン環境と身体的条件を考慮して，診察や検査を進めなければならない．大量出血で早急な止血を要する場合には，より迅速で的確な診断と治療が求められる．妊娠に関連する不正出血や個々の疾患の病態と治療の詳細は他稿に譲り，ここでは主として不正出血の診断と対応を解説する．

1．月経のメカニズム

不正出血と診断するためには，正常な月経についての基本的知識が不可欠である．月経は性成熟期の女性にみられる約1ヵ月の周期で繰り返される子宮内膜からの自発的な出血のことで，内容は血液，子宮内膜片，粘液よりなる．

月経が起こるためには，視床下部－下垂体－卵巣系の機能環が正常に作動し，子宮内膜がこれによく反応することが必要である．図1に正常月経における各種ホルモン変動と，それに対する卵巣および子宮の反応を模式的に示す．卵胞期の前半にはFSHの分泌が高まり，卵胞の発育を促進する．卵胞期の後半にはFSHとLHが協同して作用し，卵胞の急激な発達とエストロゲン分泌の急上昇をもたらす．排卵期に入ると卵胞が完全に成熟し，エストロゲン分泌がピークに達した後，ポジティブフィードバックによりLHの放出が惹起され，排卵が起こる．子宮内膜は卵胞期にエストロゲンの作用を受けて増殖し，エストロゲンのピークに一致して頸管粘液量と牽引性が増加する．黄体期に入りプロゲステロンが作用すると，子宮内膜は粘液を分泌して受精卵の着床に備える．妊娠が成立しないと，黄体の退縮に伴ってエストロゲンとプロゲステロンが急激に低下し，内膜血管であるらせん動脈は虚血性変化を起こし，脱落膜様に変化した機能層は壊死・剥離して（消退出血），月経の出血として子宮外に排出される．

基礎体温でみると，最初の2週間くらいが低温相で，排卵

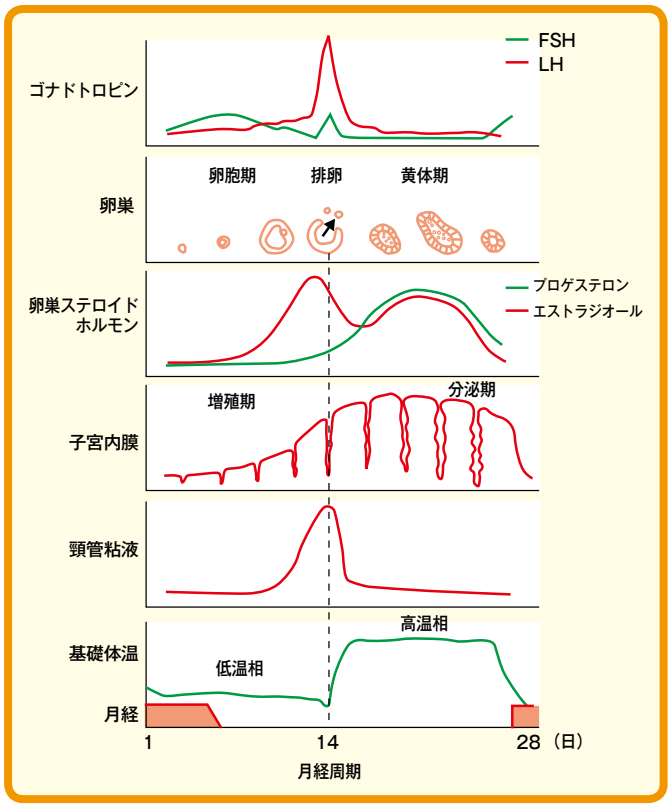

図1 正常月経周期に伴う内分泌変動と卵巣および子宮内膜の反応性変化[3)]

を境に0.3℃以上上昇して高温相に移行し，二相性を示す．高温相は妊娠が成立しない場合は約2週間持続する．

月経周期は25～38日，月経の持続期間は3～7日間が正常で，経血量は月経期間全体で50～150 mlほどといわれている．月経に関するトラブルとしては，初経・閉経の早発・遅発，月経周期あるいは月経持続期間の長短，経血量の過多・過少，月経随伴症状の異常などがある（表1）．

2. 機序による不正出血の分類

不正出血においてはさまざまな分類がなされるが，最も重要なのは機序による分類で，機能性出血と器質性出血に大別される．機能性出血は，視床下部－下垂体－卵巣系にわたる内分泌系の失調により子宮内膜組織が異常に反応して起こる子宮内膜からの出血である．不正出血の約30 %を占める産婦人科診療においては重要な病態であり，詳細は後述する．器質性出血は腫瘍や炎症，外傷などによる局所の組織障害で，その部位から出血する（図2）．

表1 月経の異常

	正常	異常	症状および将来の問題点
開始	12歳	早発月経（10歳未満）	早発思春期
		遅発月経（15歳以上）	
		原発性無月経（18歳で初経なし）	染色体異常，性の発生・分化の異常
閉止	50歳	早発閉経（43歳未満）	泌尿・生殖器の萎縮，骨粗鬆症，動脈硬化
		遅発閉経（56歳以上）	乳癌・子宮体癌罹患リスクの増加
周期	25～38日	頻発月経（25日未満）	無排卵周期，黄体機能不全
		希発月経（39日以上）	
経血量	50～150 ml	過多月経（凝血を混じる）	子宮筋腫，子宮腺筋症，貧血
		過少月経	Asherman症候群，無排卵周期，黄体機能不全
持続期間	3～7日	過長月経（8日以上）	子宮筋腫，子宮腺筋症，貧血
		過短月経（2日以下）	Asherman症候群，無排卵周期，黄体機能不全
月経時の障害	なし～軽度	月経困難症	仕事や日常生活が困難
月経前	なし	月経前緊張症	

3. 不正出血をきたす疾患の鑑別

不正出血をきたす疾患の鑑別に際して，まず**患者年齢を考慮した効率のよい問診を行わなければならない**．さらに出血部位と出血機序を組み合わせて鑑別診断を行う（図3）．

年齢

年齢に応じて頻度の高い出血原因が異なるので，患者年齢は非常に重要な因子である．初経以前では感染や外傷が多く，思春期以降は機能性出血や妊娠関連疾患の鑑別が重要となり，やがて腫瘍性疾患の割合が増加し，更年期の機能性出血，老年期の萎縮性腟炎が加わってくる．だたし，わが国においても近年若年層の子宮体癌や子宮頸癌の増加が指摘されており，若年者の悪性腫瘍を見落とさないよう注意する必要がある．ちなみに，何歳を性成熟期とするかは諸説があるが，12～50歳を性成熟期と考えるのが妥当と思われる．

問診聴取のポイント

不正出血を診断するには，年齢を考慮して頻度の高い疾患